

市川宏雄著 『「NO」首都移転』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学政治経済学部 公開日: 2011-04-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹下, 俊郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/10224

市川宏雄著

「NO」首都移転

(光文社)

竹下俊郎

政治的社会的に重要な問題が、即、国民の大きな関心事になるとは必ずしも限らない。首都（機能）移転問題はまさにその典型であろう。衆参両院において超党派で国会等移転決議がなされたのが一九九〇年の十一月。以後数百回に及ぶ委員会や部会による検討を経て、一九九九年十二月の国会等移転審議会では、移転先候補地として①栃木・福島、②岐阜・愛知、③三重・畿央の三カ所が答申された。

しかし、国民の関心は総じて低いままである。二〇〇〇年五月には衆院の特別委員会が「答申を踏まえ候補地を絞り込み二年をメドに結論を得る」と決議したが、こうした経過をきちんとフォローしている国民は多くはないだろう。じつはこの問題に関しては、議員の間にも冷めた見方が広まっていると報じられている。おまけに政府でさえも、移転になれば不要のはず

の新首相官邸建設工事を霞ヶ関で始めるという不可解さである。

だが、大方が無関心をきめこんでいる間にも行政的な手続きは「粛々」と進行している。調査等のために億単位の国家予算も使われている。首都移転計画の最大の問題点は、本来は国家百年の計といえるほど重大な事業であるにもかかわらず、国民全体を巻き込むような広がりや深みをもった議論がほとんどなされていないことである。官僚がなし崩し的に既成事実を積み重ね、結局「ここまで進んだのだから後にはひけない」という、おなじみの状況主義的なやり方で事が決まってしまうてよいものなのか。

国民の関心が高まらないことの責任の一端はメディアにもあるだろう。二〇〇〇年九月に、扇千景国土庁長官が首都移転に個人的に反対だとの意見を述べた。これとても保守党の政治的思惑（連立政権の中で存在感を誇示したいため）といった切り口で報じられることが多く、移転問題の中身について議論を深めるきっかけとはならなかった。こうした寒々しい状況を見れば、首都移転問題に真正面から取り組んだ本書の意義は強調してもしすぎることはないであろう。

タイトルからわかるように、首都移転に対してはつきりと否定的な立場に立つ著者は、推進派が掲げる首都移転の論拠を次の六点にまとめ、それぞれに詳細な検討を加える。移転推進の論拠とは、①一極集中の是正、②大規模投資による景気誘発、③都市の安全性の確保、④均衡ある国土構造の形成、⑤国民の士気高揚効果、⑥行政改革・分権推進へのステップ、である。

そしていずれについても移転による効果がほとんど期待できないこと、すなわち移転の根拠として不十分であることを、あざやかに論証していく。結局、現在の首都移転計画とは、バブル全盛期に金丸信氏らを中心とする政治家によって画策された「ハコモノ主体」の大型公共事業プロジェクトに過ぎず、財政危機が叫ばれる中、それでも関連自治体や政治家が一世一代の予算ぶんどりを狙うという、まさに「土建国家ニッポンの断末魔」にほかならないと喝破するのである。編集部の意向もあつてか、やや過激な物言いになつてはいるが、豊富なデータと世界各地の都市計画に携わつてきた著者の経験とに基づく議論は、きわめて合理的かつ説得的なものである。なお、首都移転には断固反対するものの、夏期限定の臨時国会都市（補完都市）を

那須に作るという「和解案」も最後に提起されており興味深い。

前著『しなやかな都市 東京』（都市出版）からもうかがわれたように、著者の東京に対する愛着は深く、それは本書の行間からもにじみ出ている。したがつて、本書の議論全体を「東京びいき」のように受け取る読者（とくに東京以外の地方に在住の読者）もいるかもしれない。著者が主張するように、二一世紀、日本が欧米先進国やアジアの新興国に伍して国際競争に生き残つていくためには、東京を前面に出し、東京の魅力と活力をさらに高めていくしかない。東京の持つパワーを地方に分散させるといふ首都移転計画は、日本という狭い井戸の中だけしか見ない、ローカルで時代錯誤の発想であるといふ著者の意見には筆者も同意したい。ただし、「世界の東京」に代われる都市は日本にはない。「できる兄貴・東京の足を引っ張つてはいけない」（いずれも第三章の小見出し）といった表現は、頭では理解できても、東京以外の地方在住者の東京に対する羨望や嫉妬心を抑制するには逆効果といえるのではないか。もし、本書の歯切れの良さが、地方での理解者を減らす結果をもたらしているとする

ば、ちよつと残念なことである。

それはさておき、都市をとりまく多様な問題に目配りをした本書は、東京を事例とした『都市政策入門』としても読めるものである。首都移転問題だけでなく、都市問題全般に関心を持つ多くの人に手にとつてもらいたい本だといえる。